

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ②4 最終回

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

チョークを捨てて街に出よう

リビングライブラリについて話すと「どうやって人を集めたの？」と聞かれることがあります。そこで、今号にはリビングライブラリがなぜ可能となったのかを書くことにします。そのためには、まずはわたしの担任時代について書かなければなりません。

わたしはいつも学年でもっともヤンチャであったりもっとも低学力である生徒が集まるクラスを担当しました。そこでは「進路保障」以前に「進級保障」が必要でした。ところが、わたしは決して「力のある」教員ではありません。そのことを身にしみて感じたのは、はじめて3年生を担当した時にいたKという生徒の存在でした。Kは、いわゆる高校デビューをした子で、なにか指導をしようとしても、ふた言目には「ほっとけ！」としか言わない生徒でした。なにを言っても通じないので、わたしは「もうええわ。ほっておこう」と諦めてしまいました。そんなKだったので、当然卒業判定会議で卒業不可の判定が下りました。その夜、Kの家に行き卒業ができない旨をKに伝えようと、突然Kは泣き崩れ、「センセイ、なんでわたしを見捨てたん」と言いました。その瞬間、わたしがやったことは「ほっておいた」のではなく「見捨てた」んだとわかりました。それ以来、わたしは生徒を見捨てることだけはしないでおこうと思ったのです。

しかし、「力のない」わたしがひとりで生徒を抱えられるはずがありません。そのために、家庭訪問もこまめにおこない、部落の中の隣保館での学習会にも参加しました。そんなことを繰り返す中で、家庭や地域から少しずつ信頼を寄せられるようになりました。

ただ、信頼を寄せてくれたのはそうした人たちだけではありませんでした。実は、進級や卒業が危ぶまれる生徒のことをもっとも心配しているのは、その生徒の友人たちでした。そこで、教室に行って生徒と話し込むとともに、クラスの他のメンバーに「助けて」と言うようになりました。すると、クラスのメンバーの、時として荒っぽくもある支えのおかげで進級・卒業できる生徒があらわれるようになりました。

助けを求めたのはクラスのメンバーだけではありませんでした。例えば、かつてTという生徒を担当しました。Tの両親はTが小さいときに離婚しており、祖父と二人暮らしでした。祖父は心臓を患っており、日常生活を送るのがやっとという状況でした。したがって、Tの家には生活や勉強の面倒を見る人がいませんでした。そんなTを支えていたのは、中学からの友人で他校の生徒だったNでした。試験前に学習会に誘うために、Tの家に行ったことがありました。ところが勉強から逃げたいTは家にいませんでした。そこでわたしはNに「Tを探してほしい」と頼みました。すると間もなくNはTをつれて学習会に来てくれました。わたしはNを信頼していたし、NもTをなんとかしてでも卒業させたいと思うわたしを信頼してくれていたんだろーと思います。そんなNの存在のおかげで、Tは無事卒業しました。こうした経験を繰り返す中で、力のないわたしは「コーディネーター」になればいいということを知りました。

その後、わたしは担任という立場から人権教育担当という立場になりました。それとともに、わたしはチョークを置いて、学校や京都という縛りからも離れて、あちこちの集まりに参加するようになりました。すると、そこには学校の中では出会えない魅力的な人がたくさんいました。わたしはみなさんの面白い話を一生懸命聞き、質問し、さらに魅力を探しました。魅力を見つけたら、その魅力を誰かに伝えたいと思います。いつしかわたしは、魅力的な人々同士がつながる「場」をつくるコーディネーターになっていました。やがて、そんな人たちを生徒たちと出会わせたら、きっとうちの学校のしんどい生徒がエンパワーされると思うようになりました。そこで、みなさんに「助けて」と言いました。それに応えてくれた人たちによって「リビングライブラリ」が可能になりました。

「いつきの“ヒューマン・ビーイング”」は今号で終わります。お読みいただきありがとうございました。次号から、新たなテーマで連載を始めます。